

11月16日 大町の家を出て内田とともに能登半島へ向かう。7月12日以来、震災後二度目。運転を交代しながら4時間ほどかけて北上し、まず志賀町にあるペンションクルーズというスーパーステキペンションに泊まる。私が2020年に能登半島で《移住を生活する》を行なったときにも泊まらせてもらった、家族経営の宿（当時コンビニの駐車場に座り込んで休憩していたら、クルーズの一家が声をかけてくれ、たしかプロテインバー的な食糧を差し入れてくれた。

「近くで宿をやっているの、もし通ることがあれば立ち寄ってください」と言われ、その日だったか別の日だったかは忘れたけど、家と共に訪問して普通に宿泊客として泊まらせてもらった。まいこさんを始め家族のみなさんがほんとうに暖かくもてなしてくれるし、ご飯がすごく美味しい)



クルーズで、志賀町の柳泉寺の谷内さん一家と明蓮寺の谷野さん、初めてお会いする矢口さんという方と合流し、一緒にご飯を食べる。柳泉寺も明蓮寺も、2020年の移住生活のときに敷地を貸してもらったりトラックで家を運んでもらったり、その後の「奥能登国際芸術祭」のときも色々と協力してくれたお寺。この日の夜、私が移住を生活していたときに敷地を貸してもらった3組が揃ったことになる。

谷内さん一家には4姉妹の子供がいて、うち3人（ほたか、いずみ、りこ）と再会できたのも嬉しかった。通っている小学校は震災後長らく水道が使えず、最近ようやく復旧して学校で水が飲めるようになった、とほたかちゃんが教えてくれた。なので夏はプールも使えなかったらしい。その場にいた私と内田以外の全員が、地震が起きたときのことを「こわかった」と言っていた。

翌朝9時、志賀町内の消防署へ。谷野さんをはじめとしたみなさんによる「能登の子どもと笑顔になる会」が企画した「チョークで地上絵大作戦」というイベントを一緒に行った。今回、能登に来たメインの目的のひとつ。

消防署の協力のもと、敷地内の地面に描いた「のとどん」という能登半島のキャラクターを、チョークを使ってみんなで賑やかにしていく、というもの。事前に近隣の学校に1500枚ほどチラシを撒いたらしい。開始予定の9時時点では参加者の子どもが誰も来ておらず、「もう私たちでやりましょう！」という感じで笑って描いていたけれど、徐々に子どもが集まりはじめ、最終的に20人以上の参加者が来てくれたらしい。谷野さんは最初の一人目がきたとき「よかった、ほんとうによかった。やっぱり困難というのは大事やね。一人だけでこんなにうれしい」と言っていた。



最終的に出来上がった絵も、けっこうよかった。参加者がそれぞれの風合いで描いていることが、上から見るといい感じに映った。谷内さんと3人の子どもたちも途中から来てくれて、絵を描いたり、シャボン玉を吹いたりして遊んだ。3人が何度も「村上さん」「村上さん」と呼ぶのが面白かった。



外で遊んだあとは室内に移動。私はこの日のために著者割で購入していた『家をせおって歩く』を希望者全員に配り、このプロジェクトを始めるきっかけになった東日本大震災のことなど、すこしだけお話した。サイン会もやった。完全自費で「チャリティー活動」的なものを行ったのは人生でこれが初めてだ。





その後、珠洲に移動。事前に宿泊予約をしていた「ボラキャンすず」という災害ボランティア専用の拠点にチェックイン。ここでのボランティア活動がもうひとつの目的。平床という地区の集会所の内部を、ふすまや障子や毛布などで間仕切りし、個室化した寢室が並んでいる。仕切りは背の高さくらいまでで、みんなで同じ天井を見る感じは漫画喫茶に近いかもしれない。



チェックイン後時間があつたので「いろは書店」に行き、前回来た時に1～2巻を買ってハマった『スキップとローファー』の残り全巻を買った。それから書店の人に話しかけて『家をせおって歩く』を5冊献本してきた。奥能登国際芸術祭のときに私の作品を見ていたらしく、「あれはすごい衝撃的な作品だった」「家のつくりこみがすごくて、

何度見に行ったかわからない」と、私たちが訪ねて来たことをとても喜んでくれた。来年実行予定だという新たな計画の話も聞き、また来ますと約束してきた。

夜の宿泊所、他の利用者が居間で話しているのが丸聞こえなので、早く寝ようと思ったら耳栓は必須。すこし埃っぽいのでマスクもあったほうがよい。とはいえ無料で宿泊できるのでボランティアをする身としてはありがたい。珠洲市内の友達の家泊まるという選択肢もあったが、一般向けのボランティア宿舎というものがどういう雰囲気なのか体験してみたかったので

今回はそうしなかった。駐車場には三重や大阪、多摩、千葉など様々な地域のナンバーの車が停まっていて、ボランティア同士も親しげに世間話をしていた。

明け方に一度目が覚めたとき、いろいろな種類のいびきが聞こえてくるのがおもしろかった。

「くう〜加 くう〜加.....」

「ぞーー ぞーー.....」

「ほわあ ほわあ.....」

みたいなアンサンブル。

翌18日朝8時に「ボラキャンすず」のメインテントに集合し、そこでチームが生まれ、チームごとに珠洲ボランティアセンターや能登町ボランティアセンターなど別々の場所へ仕事をもらいに向かう。

私たちは千葉から来た親子とチームを組み（なんとその親子の苗字も村上さんだった）、珠洲のボランティアセンターへ。この村上親子がとてもよい人たちで、同じチームでよかったと心から思った。特にリーダーを務めてくれたお父さんのほうは雨が降っていたら傘に入れようとしてくれたり、ロープの結び方を教えてくれたり、なにかと気を使って声をかけてくれたりする。同じチームの人と相性がいいかどうかで、ボランティアの経験が大きく左右されると思う。お父さんは今年二度目の能登半島ボランティアで、過去には東日本大震災や各地の豪雨災害のときもボランティアに行っているらしい。ひどいご時世だが素晴らしい人というのはまだまだいるもんだと思う。普段会わないだけで。

作業前に立ち寄ったコンビニの駐車場は工事関係者らしき車でいっぱい、店内のゴミ箱もゴミが溢れかえっていた。このゴミは誰が処理するのだろう。行政がコンビニと連携して大きなゴミ箱を駐車場に設置するとか、なにか対策できないもんだろうか、と思った。

前回来た時は街全体がすごく静かでこわいくらいだったし、倒壊した家屋の解体撤去もぜんぜん進んでいない印象だったけど、志賀町で会ったみなさんの話によると最近は工事車両が頻繁に通るようになり（ダンプカーがすごいスピードで走っていくのをこわがっていた）、珠洲市内も前回よりは解体撤去が進んでいる様子で多少は活気がある感じ。



午前中、チーム村上の4人は市内の一軒家でソファを処分場まで持っていく作業と、3つほどのソファを1階から2階へ上げるという作業。←かなり長いあいだ、この家で使われていたであろうソファ。処分場に持っていき、軽トラからこれが投げ出され、ただの「ゴミの山」になるのを目撃するのはきついものがあった。



作業自体はたぶん10分くらいで終わったが、依頼主の夫婦がコーヒーとお菓子を出してくれ、しばらく雑談した。

「人間関係がまったく変わってしまった」と言っていたのが印象的だ。市内に住んでいた親戚はほとんどがいなくなってしまった。多くは金沢に避難したままで、こちらに戻ってくるという話もあるが、住むためには家を改修したりしなくてはいけないので資金が必要だし、まだ地震も続いているというのもあり、時期の目処は立っていないらしい。近所のコミュニティがなくなってしまったので、私にとってはなんでもない、ソファを2階に上げるという作業も、老夫婦だけでは難しい。

リーダーの村上さんは「国の支援が遅い気がします」とはっきり言い、私たちもうなずいた。



お昼に「すずなり食堂」という、道の駅すずなりのとなりに新しくオープンした仮設の食堂で「香箱がに定食」を食べる。隣に座っていた工事関係者のおじさんが、ものすごく優しくていい声で電話をしていて、泣きそうになってしまった。彼らが席を立つ時、出やすいように内田が椅子を引いたのだけど、それに対するおじさんのお礼の言い方も誠実で、あんなにまっすぐな「ありがとうございます」を聞いたのは初めてかもしれない、と思った。



午後は壊したブロック塀のコンクリート片をひたすら軽トラックに積み込んで処分場に持っていく、という作業。チーム村上の他に2人いて、みんなで3台の軽トラを使って、現場と処分場をせっせと往復する。マニュアルの軽トラを運転できることがとても役に立った。



15時までにボランティアセンターに戻ってくる、という時間的な縛りがあったので全て運び出すことはできなかった。三畳分ほどの面積に膝くらいまで瓦礫が積まれている程度の量だったが、軽トラ3台と6人がかりで半日やっても終わらないという事実から、被災した地域全体の解体撤去作業の膨大さを想像すると気が遠くなる。



作業を終えてセンターに戻ると、スタッフのみなさん全員がにこやかに「おつかれさまでした」と言ってくれる。他のボランティアスタッフのひとたち（50人くらいはいたんじゃないか）とも「おつかれさまでした」と挨拶を交わす。みんなで一仕事終えたあとの、和やかで一体感のある心地よい雰囲気。「おつかれさまでした」という挨拶が、普段とは全然違って聞こえた。

お金が絡んでいない、純粋な「意志」による行動のおかげか、本当の意味での「おつかれさまでした」を言い合っている、と思った。とても心地がよかった。チームを組んだ村上親子や、瓦礫と一緒に撤去した二人のおじさんたちとも立ち話をして、「またどこかで会いましょう」と挨拶して別れた。

この雰囲気が好きで、ボランティアにくる人たちもたくさんいるんだろうなということが想像できる。いわゆる災害ユートピアが、よいかたちで実現されているように感じた。いろいろと大変なこともあるだろうけど、この風通しのよい感じが、スタッフのモチベーションにもなってるんじゃないか。



リーダーの村上さんに教えてもらい、ボランティアに行く往復の道は高速道路が無料になるということを知った。国土交通省とネクスコが無料にしてくれているっぽい。私たちは往路はもう払ってしまったので、復路だけ申請して無事に大町までの高速料金は無料で帰ることができた（※）。



解体/撤去は以前よりはだいぶ進んでいるとはいえ、左の写真のような家屋はまだいくらでもある



（※）この件に関して、高速道路が無料になる、というのは無条件で良いことなのでボランティアに行きたい全員が喜ぶのだろうと以前の私なら思っていたかもしれないが、アメリカでトランプが二度目の当選を果たしたショックから読み始めた『壁の向こうの住人たち』という本に書かれていたいくつかのエピソードからいろいろ想像して、「ボランティアをすると高速道路が無料になるのはいいことである」というのも一つの政治的なイデオロギーだよなと、今なら思える。「高速道路を国が無料にするなんて許せない」という価値観はありえる。それを想像できるかどうかは、今後かなり重要になっていくんじゃないか。

つまり、大きな政府を志向するべきか、小さな政府を志向するべきか、という方向性の違いだ。国の政策によって無料で高速道路が使える、ということは、ある意味では「政府が自分たちの人生を生きているようなもの」と言える。「私は自分の意志で同じ土地に暮らす人々を助けに行きたい。その行為に政府が援助をするということは、政府による、私の人生への介入である。それは認められない」という意見はありえる。カウボーイ的な価値観と言えるかもしれない。

なぜアメリカのティーパーティー支持者のシングルマザーが、経済的に大変な思いをしながら子育てをしているのに、育児給付金の支給を約束する民主党ではなく、共和党を支持するのか。左派から見るとまったくわけがわからない選択に見えるが、当人が例えば「大きな政府」が私たちのコミュニティを壊してしまったと感じているのであれば、その気持ちは想像できる。

